

過酷な診察現場

私が勤務することになったスーダン国境の赤十字ロピディン戦傷外科病院（ケニア）は、ベッド数560床で、二つの手術室、ICU（集中治療室）、術後病棟、10の病棟などを整え、各国の赤十字社から派遣されてきた18人の医療関係者と約180人の現地スタッフが勤務していた。

各国からの派遣員は、3カ月から1年の契約で交代していくため、治療方針には一定の基準が必要となり、すべてのスタッフが従うガイドラインが定められていた。これは治療の一貫性を保つために不可欠で、現地スタッフはその一貫性を維持する重要な役割を担っていた。

この病院は、原作さだまさし氏、主

名古屋第二赤十字病院名誉院長
石川清 24
愛知医療学院短期大学学長

石川 清 24



ロピディン戦傷外科病院での診療

濱大沢たかお氏の映画「風に立つライオン」の舞台になった病院だった。制作時にはこの病院はなくなっていた写真などを借りていった。

「命の選別」 目の当たりに

毎日、スーダンから数人の患者が飛行機で搬送されてくるのに加え、ロキチヨキオ近郊からも重症の患者が運ばれてきた。

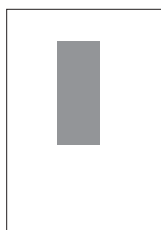
スーダンから搬送されてくるのは、ほとんどが銃で撃たれた兵士だが、飛行距離が長く、患者の搬送には天候やスーダン側の飛行許可など、さまざまな条件や制約が付きまとうので、病院へ到着した時には、負傷してからすでに何日も経過していることがほとんどだった。

私はその搬送用の飛行機に乗って、

一度スーダン国内へ行ったことがあった。そこでは厳しい「命の選別」が行われていた。通常、フライングナースという若い看護師の任務だが、彼女らは滑走路の横に集められている患者の中から、助かる見込みのある患者だけを選んで連れてくるのだ。選ばれなかった患者はそこで死を待つことになる。

スーダン国内で治療を受けることなく死亡していく患者数を推し測ることはできないが、おそらくは相当の数にのぼると思われる。

患者搬送の飛行機の中は大変な状態だった。負傷してから何日も経過しているため、傷口が腐り、ものすごい悪臭が充満する中で、患者ケアをしながら搬送しなければならなかった。若い看護師にとっては非常に過酷な勤務だった。



異なる命の価値

私の麻酔科医としての仕事は、手術中の麻酔管理、ローカルスタッフの教育、術後患者管理などであった。限られた薬しかなく、モニターや検査もできない状況で、麻酔・集中治療をやらねばならない。

最初は戸惑ったが、やっていることは基本的なこと、ここでの原則「simple and safe」を実行すればよく、さほど難しくはなかった。

戦傷外科病院では、日本の病院のように完璧な医療をするのではなく、「基本的な医療」「その地域で一般的とされる医療」を施すこととし、限られた患者だけを治療するのではなく、「できるだけ多くの患者に、できる限り最善の医療を行うこと」を方針とし

名古屋第二赤十字病院名誉院長
石川清
愛知医療学院短期大学学長

石川 清 25



限られた薬剤や必要最小限の医療機器のみで行われる医療

できるだけ多くの患者に

ていた。

麻酔・集中治療については、ICU 最低限の医療機器しかないため、日本の医療を受ければ助かると思われた患者（集中治療室）に酸素はあるが人工呼吸器がないなど、限られた薬剤や必要

じない様子だった。

それほど痛みに強いスーダン人が、一度だけ涙を流す場面があった。足の傷の腐敗が進んで、脚を切断しなければならぬ患者が「脚を切りたくない。切ったら走れなくなる。走れなくなるのなら死んだほうがいい」と

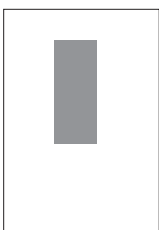
者が何人かいた。

この方針に従って医療を行う中で、

言って泣いていた。

「スーダン人の命の価値と日本人の命の価値の違い」「ここでは患者が文句を言う機会もなく、医療過誤という問題もない」「スーダンの患者は、どう思うかわれわれを見ているのだからか」など、次々に疑問がわいてきた。また、スーダン人の診療を行って驚いたことは、スーダン人は痛みに本当に強いということだった。手術の際に行う点滴で、私が得意なはずの点滴を何度か失敗しても、まったく痛みを感じた。

「一度は納得せず、手術を諦めたが、後日、痛みが増してきたのと、脚を切断したほかの患者が義足をつけて走っているのを見て、自分も脚を切っても走れることを知り、その患者は納得して手術を受けた。負傷してから病院へ到着するまでに何日もかかるので、結果的に四肢切断が必要となることが多く、日本ではとて想像ができない医療の世界だった。



ロキチヨキオでの日々

毎日、病院での仕事が終わると、金網に囲まれたコンパウンド（居住区）へ戻った。そこには、いろいろな国から派遣された医療関係者が50人ほど住んでいた。

NGOの中には命がけの仕事をしている人もいるが、赤十字は安全が第一で、身の危険を冒したり、自分を犠牲にしてまで活動を行わないことを原則としている。ロピティン病院もコンパウンドもセキュリティはしっかりしていた。

ロキチヨキオに到着したその日の夜、金網を破ってコンパウンド内に賊が押し入り、パイロットに銃を突きつけて金品を奪う事件が起きた。その事件後はガードが厳しくなり、夜間は銃

名古屋第二赤十字病院名誉院長
愛知医療学院短期大学学長

石川 清 26



現地のコック（左）とカフェテリアの料理

まさに「ゴールドデン・プリズン(黄金の牢獄)」

を持った方声が聞こえてくることしばしばあった。

コンパウンドでの食事は、3食ともド内を巡回 カフェテリア方式で、現地のコックがするように料理を作ってくれるので、フルコース

なり、夜間の歩行での外出は禁止となった。

私も、バンガローの個室が与えられ、寝る

身の危険を感じることが多かったが、

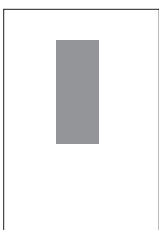
深夜に村のほうから銃な生活を営むことができた。しかし、

最初はおいしいと思った食事でも、脂っこいので、同じメニューが1週間おきに繰り返されるので、3週間目にはあきてしまった。脂が合わないのか、あるいは暑さのせいなのか、下痢をして食事ができないことが何度かあった。

また、毎日の生活は金網に囲まれたコンパウンドと病院のみであり、ここで暮らす派遣員にとつて、休日などの自由時間の過ごし方は、読書、ビデオ・テレビ鑑賞、テニスなどに限られていた。

まさに、恵まれてはいるが自由を奪われた生活であり、ジュネーブのブリーフィングで聞いた「ロキチヨキオはゴールドデン・プリズン(黄金の牢獄)」という謎めいた言葉の意味を理解することができた。

まさに、恵まれてはいるが自由を奪われた生活であり、ジュネーブのブリーフィングで聞いた「ロキチヨキオはゴールドデン・プリズン(黄金の牢獄)」という謎めいた言葉の意味を理解することができた。



赤道直下の灼熱

それにしても、赤道直下に位置するロキチヨキオの熱さにはこたえた。日中の平均気温は35度で、日なたでは40度以上にもなり、何かを考えたり、何かをする気にはまったくなれなかった。カフェテリアで昼食を終えて、自分のバンガローまでの50メートルほどの日なたを歩くのさえ億劫(おっくう)であり、午後は扇風機をつけてベッドの上でいつも横になっていた。

多くの派遣員も、昼食後から午後3時くらいまでは休息を取っていた。日本にいる時のように日中も働いていたら、それこそ寿命を縮めることになる。ところが、現地のルツカナ族はそんな灼熱(しゃくねつ)の中でも、平気で長距離を歩いており、本当に暑さに

名古屋第二赤十字病院名誉院長
石川清
愛知医療学院短期大学学長

石川 清 27



英語の話せるスーダン人兵士との交流

スーダン戦傷兵士のこと

強い人たちだと感心した。

私は3カ月間で7キヤセタが、決して病を患ったわけではなく、暑さのせいで食べる気がせず、自然と減量した

形となった。

をくれ、シャツをくれ」と訴えた。私が毎日違うシャツを着ていたの、たくさんシャツを持っているのを知っていたからだ。

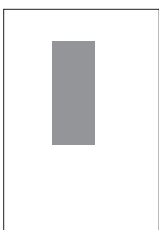
患者であるスーダン人は、見た目は怖い顔をしているが、人なつこく、愛想が良く、とても兵士とは思えない。私は「あなたたちだけにあげると不公平になるからあげられない」と断った。すると「自分たちは英語を話せて特別なので、自分たちだけにくれればいい」と訴えた。

2人は、その後も毎回、私が病院に行くたびに同じことを訴えた。最終的には、彼らの言うことももつともかなと思ひ、シャツをあげることにした。翌日から2人は私のあげたシャツを喜んで着ていた。

彼らの考え方は日本人とは異なり、習慣や考え方の違いを知るのおもしろかった。

彼らは非常に貧しく、顔を合わせると何かが欲しいがった。英語を話せる2人の兵士は、私が病院に行くといつもすぐに親しく寄ってきて「シャツ

2人のうち1人は、けがが治ったら国に帰ると言っていたが、もう1人は再び戦場に行くと言っていた。複雑な思いが込み上げてきた。



熱意だけではできない

派遣中に感じたストレスは、耐え難い暑さのほかにもいくつかあった。

日本人は私のほかに誰もいない、現地スタッフや各国派遣員とは英語しか通じない、1日起きる緊急呼び出しのオンコールがある、休みは日曜日のみ、十分な医療設備がない所で麻酔・集中治療をしなければならぬ、コンパウンド（居住区）と病院以外はどこにも行けない、マラリア、エイズ、エボラなどの病気が蔓延（まんえん）しているなど、非常にストレスの多い毎日だった。

私はテニスコートがあることを事前知っていたので、ストレス解消のために、テニス道具一式を送っていたが、この判断は正解だった。何人かのテニ

院長 石川 清
名誉 石川 清
短期 石川 清
大学 石川 清
病院 石川 清
十字 石川 清
赤十字 石川 清
第二 石川 清
屋敷 石川 清
名古 石川 清
愛知 石川 清



石川 清 28

経験が私の使命

仲間が恵まれたので、「ゴールデンレス解消に役立った。プリズン（黄金の牢獄）」でのスト



ストレス解消に役立ったテニス（左端が筆者）

と40度の下でテニスをしたことがあったが、本当に死にそうになった。

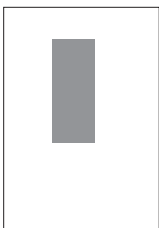
災害救護には「善意だけでは災害救護はできない」という言葉がある。いくら善意や熱意があっても、十分に訓練された技術や能力がなければ、災害の現場では邪魔になるばかりで、真の災害救護はできないという意味だ。

私はロキチョキオでのミッションを経験して、同じように「熱意だけではミッションはできない」と思った。限られた期間で有意義なミッションを遂行するには、十分に準備したうえ

で臨む必要がある。各国の派遣員や現地スタッフと必要なコミュニケーションを交わすには、支障のない会話ができればならないし、麻酔の技術や戦傷外科の基本などを事前に理解しておく必要がある。

終わることのないスーダンの紛争は、平和な日本にいてはとても想像ができない世界であった。国際救援に行きたい意志があっても、実際にこうした活動に参加するのは非常に難しく、赤十字病院にいなければこの機会はなかった。

3カ月という非常に短い期間ではあったが、若い頃からの国際救援に対する熱い思いを実現できたことは、私自身にとって非常に幸運であった。この経験を若い人たちに伝えることが私の重要な使命だと思っている。



妻が迎えに

確かに大変な日々であり、自分の立てた目標を達成できなかったが、有意義な経験ができたし、楽しいこともたくさんあった。ひと言で言えば「大変であったが楽しかった」というのが全体の印象だ。

とりわけ印象に残っているのは、いろいろな国からの派遣員や現地スタッフと楽しい時を過ごせたことと、多くの友人ができたことだ。

毎日の生活が単調な繰り返しだったため、何かことあるごとにパーティーを開き、みんなで楽しもうという雰囲気があった。特に、ヨーロッパから来ている連中はそうだった。

10人くらいのパーティーはいろいろな機会に企画され、個人のバンガロー

院長 石川 清
名誉 石川 清
短期 石川 清
病期 石川 清
十字 石川 清
赤学 石川 清
第二 石川 清
屋学 石川 清
名古 石川 清
愛知 石川 清

石川 清 29



大変だったが楽しい日々

の庭先でワインやつまみを持ち寄って、話をしたり、ダンスを楽しんだ。12月はパーティーが目白押しで、クリスマスや新年のパーティーは、かなり大掛かりで手の込んだものだった。

年末には2グループに分かれて、ツルカナ湖への1泊2日の旅行が催され、移動には患者搬送用の飛行機を使い、パイロットを含めて約20人が参加した。自分たちだけの専用飛行機なので、誰もが億万長者の気分を味わった。

比べれば、やはり暮らしは非常に貧しかった。われわれ日本人に理解し難いのは、一夫多妻という習慣だった。普段住んでいる家から少し離れた家に別の妻と子どもが住んでおり、妻同士、お互いは感知せずという態度で、甲斐性さえあれば何人でも妻が持てるのだ。

加した。

ミッシェンを終えて、日本へ帰国する時、家内がひとりでロキチヨキオまでやって来た。ナイロビまでは比較的

の周りを遊覧飛行したし、私はツルカナ湖で50ポンドのナイルパチを釣り上げた。こんな大きな魚を釣ったのは生まれ初めてだった。家内は一人ですべて来た。家内のたくましさに感心した。

現地スタッフとも仲良くなったり、家庭を訪問して、友好を深めることもあった。日本に地を観光して帰国した。



ツルカナ湖で釣った50ポンドのナイルパチ

